

「2023年度」

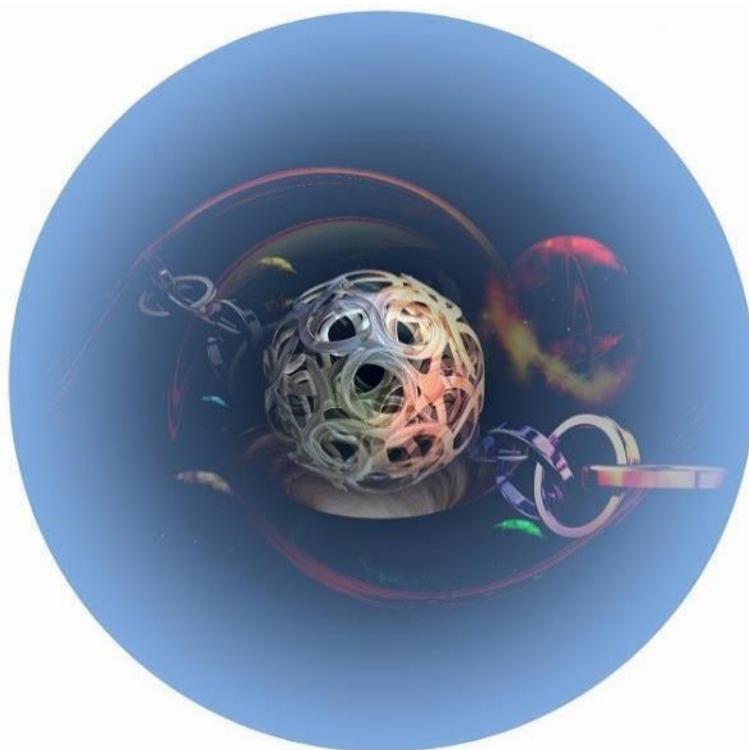
第15号

2024年 5月19日発行

特定非営利活動法人

福島環境カウンセラー協会報

絡み合うもの



<y・s>

目次

1. はじめに	会長 相楽 昌男 2
2. 活動の振り返りと次年度の計画 (案)	事務局長 新山 敦司 3
3. 会津若松市のごみ排出量の現状と課題	会員 新山 敦司 5
4. 「エコプロ2023」視察報告	会員 白石田 良一 7
5. 「2023 NEW環境展、地球温暖化防止展」報告書	会員 柳沼 守好 10
6. 入会に伴う自己紹介	会員 沼木 俊亮 12
7. 環境カウンセラー新人・よろしくお願ひします!	会員 添田 ゆかり 13
8. 地域の水環境保全活動で水生生物調査に参加して	会員 菊地 宗光 14
9. 布から眺めた温暖化	会員 熊本 隆之 15
10. 環境カウンセラー2年目の活動	会員 佐藤 公俊 17
11. うちエコ診断をとおしてカーボンニュートラルへの道	会員 小野 信彦 19
12. パッシブデザイン探求・堰と里山ボランティア	会員 相楽 昌男 20
13. 休耕田などを活用した集落のビオトープづくり参考事例	元会員 宗像 亮 22
14. 相馬野馬追と人々の暮らし	<特別寄稿> 元会員 長澤 利枝 24
会報をご覧いただいている皆様へ 27

1. はじめに

会長 相楽 昌男

最近、「環境の本質は何だろう」と思うこの頃 2 つの本のある言葉が気になっています。

● 文化の危機（環境会議 2002/3 石弘之氏）

「なぜ日本人は文化を大切にしないのか。その理由を、環境意識の低さに見る。」

「一人ひとりが、自然とともに人間が本当に人間であることが許される世界が実現・・・。」

● ローカルな思想を創る（技術にも自治がある 2004/2 大熊孝氏）

「国破れて山河あり、国栄えて山河なし」

「有事にあつて最後に人々の存亡を決めるのは自然のあり様そのもの」

※環境について、歴史文化を踏まえ多様な価値観を互いに共有する事が大事と思いました。

さて、コロナ禍も落ち着き、当会の活動もオンラインも活用して動きやすくなりました。環境省事業として、環境カウンセラー制度が始まって 2 8 年目で登録者の減少傾向から SNS の活用で 2022 年より若い世代がわずかに増えました。活動機会の充実が求められます。

当会の活動は省エネアドバイザー事業を軸に地球温暖化・ゼロカーボン、SDGs 学習に関するセミナーや環境保全体験活動をしています。

1 0 月には「REIF ふくしま 2023×ふくしまゼロカーボン DAY！」が開催され、当会も出店しました。前年同様、様々な団体・企業・行政・学校と交流もできました。

次年度の新会員に 2 名の方が入会されました。現会員も含め多様な活動に期待します。

私事ですが環境活動に入るきっかけについて振り返ります。会社での仕事で冷熱プラント建築やパッシブデザインシステムに関わる中で環境問題へ関わりたいと思うようになりました。本格的な活動のきっかけは郡山市内に流れる逢瀬川で 13 年間たった一人川の中のゴミ 130 トンを拾い続けた撞井恒夫さんとの出会いでした。初めて胴長でゴミ拾いをしたときに体を包むような水圧の中、川の中から見ると自然の魅力に嵌りました。逢瀬川のこと知りたくなり、水害や歴史文化を調べ、仲間と専門家をお呼びし学びました。その後、カヌーや竹細工体験・川塾交流へとつながりました。並行して、柳川掘割物語（ジブリ）や古民家再生活動で民族文化映画の上映会を手伝う中で文化環境を学び、川のごみ拾い体験ワークショップなど実施。

改めて、豊かな生き方へつながる環境活動のきっかけづくりとして、継続的な体験型ワークショップ（みんながスタッフ）が不可欠と感じているところです。



写真：「逢瀬川のゴミ退治」川から見る自然
ごみになる前のこと思い優しく拾う。思い多々
できるだけゴミにしないために分解を楽しむ！

11月22日 ★第3回 UD懇談会

■ 疑似体験ワークショップ（ハードとソフトの関連性）

- 個々の問題点を問うよりも『根本的な暮らしやすさとは何か？』を探るために客観的に評価してみることも大事？

記録： [第3回懇談会概要報告.doc](#)



2003/3/3

【逢瀬川流域環境UD】2002

写真：ZUUZ.3.3

体験ワークショップで学びあう
行政・企業・市民参加 次の行動へ

2. 福島環境カウンセラー協会、活動の振り返りと次年度の計画（案）

事務局長 新山 敦司

令和5年度は、新型コロナウイルス感染症の位置づけが代わり、イベントの復活などこれまでと同じような活動が開始しました。

当協会でも、イベントへの参加を行いました。

一方、学習会の開催では、オンラインの良さもあることから、ハイブリット方式での開催とし、参加の幅も広がってきたと思います。

令和6年度は、より多くの会員や県民の皆様役に立つ学習会やカウンセリングを行いたいと思っています。

令和5年度の活動

1. セミナーや研修会

1) 福島県 2050年カーボンニュートラル（5月21日）

- ・ 福島県環境共生課のご担当者をお招きして、福島県がカーボンニュートラルに向けて行う事業などの紹介をしていただきました。

2) エネルギーの地産地利用の意義と新電力について（7月29日）

- ・ 講師に、会津エナジー株式会社 代表取締役佐藤弥右衛門様、会津エナジー株式会社 専務取締役国奥真由美様をお招きして、会津電力を立ち上げた経緯、会津エナジーを立ち上げエネルギーの地産地消を目指していくこと、会津エナジーの扱う電源についての学習を行いました。

2. イベントなどへの出店

1) 環境フェスタ in 会津（10月15日）

- ・ SDGs、省エネ診断のパネル展示。エコイズでの啓発活動などを行い、約200名ほどの市民に立ち寄っていただきました。

2) REIF ふくしま 2023（10月12日・13日）

- ・ 省エネ診断の紹介とエコアクション21の展示。

3. 会員の学習派遣

会員の学習支援として、交通費補助を行っています。

- ・ 2023NEW 環境展/地球温暖化防止展（5月25日）：1名派遣
- ・ エコプロ 2023（12月6日～8日）：1名派遣

4. 福島県省エネアドバイザー派遣事業

- ・ 福島県が行う事業に、当協会より「アドバイザー」を派遣しています。
- ・ 令和5年度は、30件の省エネ診断を行いました。

令和6年度の計画案**1. セミナーや研修会**

- 1) 脱炭素先行地域、会津若松市の取り組み」(5月19日)
 - ・ 会津若松市環境生活課のご担当者をお招きして、脱炭素先行地域のことや、これから進めていく施策などについて学びます。
- 2) 環境学習会
 - ・ 会員の要望を聞いて具体化していきます。
- 3) 省エネ診断学習会
 - ・ 省エネアドバイザーの養成や、スキルアップのための学習会を計画しています。
- 4) 自然観察会
 - ・ 子どもと一緒に学べる観察会を計画しています。
- 5) 施設見学会
 - ・ 日本大学工学部工学研究所ロハス工学センターの見学会を計画しています。

2. イベントなどへの出店

- 1) 環境フェスタ in 会津 (10月12日)
 - ・ SDGs、省エネ診断のパネル展示。エコイズでの啓発活動などを計画しています。
- 2) REIF ふくしま 2024 (10月17日・18日)
 - ・ 省エネ診断の紹介とエコアクション21の展示を計画しています。

3. 会員の学習派遣

会員の学習支援として、交通費補助を行っています。

- ・ 2024NEW 環境展/地球温暖化防止展 (5月24日～26日) : 会員の派遣を計画。
- ・ エコプロ 2024 (12月4日～6日) : 会員の派遣を計画。

4. 福島県省エネアドバイザー派遣事業

- ・ 福島県が行う事業に、当協会より「アドバイザー」を派遣します。

3. 会津若松市のごみ排出量の現状と課題

会員 新山 敦司

令和4年度の福島県の1人1日当たりのごみ排出量(1,021g)は、富山県と並び全国ワースト1位で、リサイクル率(12.8%)は全国ワースト2位でした。たいへん衝撃的な報告でした。

私の住む会津若松市は、10万人から50万人の市でワースト10位となっています(令和元年)。

今年度、会津若松市ではごみ減量の取り組みが進められることになっています。

1. 現状の排出量

【1人1日あたりのごみ総排出量 (g)】

区分		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	計画目標 (令和7年度)	目標まであと
ごみ総排出量		1,250	1,257	1,241	1,231	1,229	970	259
内 訳	生活系ごみ排出量 ※資源物を除く	647	651	662	647	643	480	163
	事業系ごみ排出量 ※資源物を除く	335	338	307	307	312	200	112
	資源化量 (総リサイクル量/t)	268 (11,852)	268 (11,752)	272 (11,726)	277 (11,708)	274 (11,469)	— (13,000)	— (1,531)

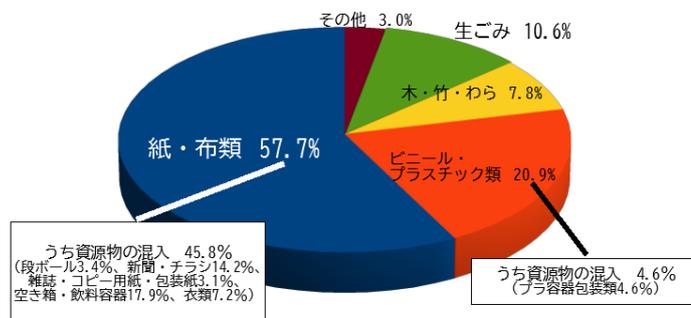
会津若松市の令和7年末の一人一日あたりの排出量目標は970gですが、令和4年は1,229gとなっており、目標達成にはかなり高いハードルがあります。

現在、焼却場の老朽化に伴い、新しい焼却場を建設していますが、人口減少も見越した廃棄物の排出量を前提にした設計となっており、このままでは処分ができず、持ち込みを停止するようなことが発生する可能性があります。そのことにより、緊急的に市内の燃えるごみの回収ができない日が出てきてしまう可能性があります。

そのため、新しい焼却場が稼働するまでに排出量を削減していく必要があります。従来の処分場も稼働すれば良いのではないかとの声もありますが、老朽化している処分場の維持管理の為に毎年多額の経費が掛かっており、そのことによって経費が増え、市の財政を圧迫することになります。

2. 組成調査で分かったこと

会津若松地方広域市町村圏整備組合環境センターが令和4年に行った調査では、「燃やせるごみ」の中身を分析すると、「紙・布類」が57.7%、次いで「ビニール・プラスチック類」が20.9%、「生ごみ」が10.6%となっています。



「紙・布類」が一番多いのですが、資源として利用できるものが、45.8%もあり、空き箱飲料容器が17.9%、新聞チラシ14.2%、空き箱が17.9%もあります。これを、市民の4人に一人がリサイクルに回せば、全体の約7.2%のごみ削減になります。

次に多いのが、「ビニール・プラスチック類」で20.9%となります。こちら、市民の4人に一人がリサイクルに回せば、約3%のごみ削減になります。

合わせて、ごみ全体の約10%の削減となります。そうすると、一日当たりのごみ排出量は1,106gとなります。まだ目標には達成できません。そのことから、かなり高いハードルと言えます。ただし、2人に1人が行えば、達成可能な数字とも言えます。

3. 生ごみの減量もカギです

実は、組成調査の結果は乾ベースです。湿ベースでみると生ごみは45.4%を占めます。

ただ単に、乾燥して排出することでも大きな削減となります。しかし、たい肥などにすればかなりの量を削減することができます。

そこで、会津若松市では「キエーロ」を普及させようとしています。

<https://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2009120100018/>

キエーロは、黒土中に含まれるバクテリアの力を利用し生ごみを分解し消滅させる生ごみ処理機です。葉山町発祥で、臭いや虫の発生が少なく投入後堆肥がでないなど手間がかからないことから注目されています。

ただし、気温が下がる11月から3月までは消滅時間が長くなることが課題です。

4. 4月よりプラスチックの回収を開始しました

これまで「燃やせるごみ」として収集していた24品目のプラスチック製品を、プラスチック製容器包装と一緒に資源物として収集しています。近いところでは、仙台市が行っていますが、県内では初の取り組みです。

<https://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2023112700017/>

クリアファイルやなプラスチック製のストロー、スプーン、フォーク、PPバンドやビニールシート、バラ（弁当の仕切り）なども含まれます。まだ周知がされていませんが、今後期待ができます。

5. 今後の課題

会津若松市では、古着の回収も行っており、プラスチックの回収も行っていますが、市民への浸透は簡単ではありません。

今後、新しい処分場が稼働する令和8年4月に向けてごみ減量の対策が行われますが、簡単なことではありません。

市民の4人に1人が、きちんと分別していけるには、「楽しくやる事」「お得感があること」がカギとなると思います。

また、有料化は効果がありますが、不法投棄が増えます。

いずれにしても、「スマートシティ会津若松」を目指して、市民全体の活動にしていかないと精工はしないと思います。

僕も、汚名返上の為にできることをやっていこうと思います。

4. 「エコプロ2023」視察報告

会員 白石田 良一

◆全体の概要

2023年のエコプロは、来場者は写真のように、児童・学生が大変多くなっていた。今回のポイントは、2050年カーボンニュートラルの実現に向けた環境関連企業の取組について視察することにした。各ブースは、小規模ブースが多くなっている。大企業でもブース面積は狭くなっており、ポイントを絞った展示となっていた。

特徴としては、ゼロカーボンに向けた、CO₂排出量の算定、可視化のコンサルティングと一部ソリューション事業が増加していた。また、ブースでのタイムスケジュールを決めたプレゼンが多くなっている。一方、SDGsについての訴求はあるが、年々減って来ている印象である。また、「デコ活」については、PRは少ないと感じた。



東京ビックサイト



エコプロ 2023 看板



来場者の様子

◆製鉄業のゼロカーボンへの挑戦

・製鉄会社は、鉄鉱石から酸素を取り除く高炉での還元の際に、コークス等を使用し、鉄1tの生産時に約2t~2.3tのCO₂が排出されます。2050年カーボンニュートラルに向け、各社取組んでいるが、昨年までは、実績があまり無かった。今年日本製鉄では、水素吹き込み試験では、CO₂排出量の22%削減が確認されていた。2023年11月には、30%以上を削減し、残りはCCSであるが、国外でのCCSに向けて、船舶による搬出が検討されており、2040年には、50%以上の削減を見込んでいる。

◆CCS 実証プロジェクト

・前回の視察では、日本初のCCS (Carbon dioxide Capture and Storage: 二酸化炭素回収・貯留) プロジェクト (CO₂の分離・回収、圧入、貯留、モニタリング) が北海道苫小牧市で実施されていることについて報告しました。今回は、それ以降の現在の状況について確認を行った。貯留可能量は、約5億tで、面積としては、500m*500m程の広さとなる。苫小牧に決まった理由の1つは、貯留場所が海底であったことが大きく、この施設には300億円の費用がかけられた。この方法がコスト的に合うかどうかだが、1t貯留するのに、6~7,000円の費用となるため、CO₂回収費用をいかに下げるかがポイントとなる。石炭火力発電所にて、CCSを行おうとする場合には、100万tの貯留で、25万tのCO₂が出てしまうので、効率が良くない。現在国は、7つのプロジェクトを丸かかえで立ち上げている。例えばCO₂の輸送につなげる船舶技術であるが、既に三菱重工で輸送船は出来ている。CCSのためには、新たな法律も必要となっており、現在検討中である。2050年カーボンニュートラルを実現しようとした時に、CCSはCO₂排出量全体の約20%を賄えないと実現は出来ない状況となっており、早い段階での商用化が望まれる。

◆EVのインバータ化

・昨年、環境省のSNF実証について報告したが、高精度、軽量、低熱膨張の特性を活かし、自動車の軽量化による燃費向上について実証がされていた。本年は、EVの走行モーター駆動用のインバータ化についての研究が紹介されていた。インバータの半導体ウエハーをパナソニックと大阪大学が共同で研究開発し、既に完成していた。このことによって、従来のシリコンパワーデバイスに比べ、GaNインバータは60%以上の損失低減が可能となる。EVの電費向上、航続距離の長距離化が期待でき、効率が10%~20%改善され、CO2排出量の削減に寄与できる。

◆グリーン証書

・カーボンニュートラルに向けた方法の一つとして、再生可能エネルギーを活用することになるが、日本自然エネルギー（株）では、オンラインで電力証書を発行するサービスが行われている。電力証書の発行には、申請登録が必要となるが、日本品質保証機構（JQA）から認証されている。手続き的には、使用量分を購入する手続きだけで、電力会社やメニュープランの変更は生じない。将来、福島環境カウンセラー協会が行う事業やイベントを、グリーン電力を使用して行うことも考えられる。価格は、4~5円/kWhとなっている。但し、20万kWh以上で価格は変わる。



グリーン電力証書

リコーの樹脂判別装置

PPと判別され表示されている

◆樹脂判別技術

・リコーでは、モバイル型の樹脂判別装置（上記写真参照）の展示があった。13種類の樹脂を、約2秒で判別し、表示がされる。廃プラスチックのリサイクル率を向上されるツールとして期待されます。また、混練・積層樹脂など、プラスチックの混合比率（最大3種）を算出することが出来、判別精度の向上や、検査の精度アップに役立つ。価格は、898,000円で、2023年3月に発売された。

◆電力の可視化とカーボンニュートラルソリューション

・アスエネ（株）は、エネルギーデータ（スコープ1・2・3のサプライチェーン）の回収、入力、算出をAI+人力で自動化し、エネルギー削減コンサルやCO2オフセットの為のクレジットなど、ワンストップで目標達成を支援してくれる。

・（株）エニマスでは、ポータブル型の通信電流計の紹介がされていた。400Aまで対応（400A以上もある）可能で、取り付けが簡単で工事不要。電力量、電気料金、CO2排出量がリアルタイムに

把握できる。価格は、398,000円で、2年間フォローされる。3年目からは、月当たり3,000円の通信料がかかる。



通信電流計

設置の状態

エコファースト

◆各種認証制度

・(株)日経BPコンサルティングでは、カーボンオフセット認証/ニュートラル認証についての紹介があった。認証団体はカーボンオフセット協会が行い、環境省の第三者認証基準による。要件は、GHG削減目標を含むカーボン・フットプリントマネジメントプランの策定、削減の実施、管理体制の構築が求められる。利用できるクレジットとしては、J-クレジット、JCM等日本国内で流通するクレジットのみで、検証機関は、日本品質保証機構、日本能率協会、日本海事協会などが行う。

・エコファースト制度は、環境大臣が環境分野のトップランナー企業を認定する制度で、認定にあたり、地球温暖化対策、廃棄物・リサイクル対策、自らの環境保全に関する取り組みを約束する必要がある、現在、66社(下段写真参照)が認定を受けている。



◆その他

・パナソニック(株)では、世界で初めてインドネシアのパームオイルを取った後に伐採された廃材を回収し、再生ボードを作成し、建築材料として活用している。通常、伐採されたアブラヤシは、農園に放置され、腐敗してメタンガスを発生し、地球温暖化につながっていた。この取り組みで、新しい雇用の創出ができました。

5. 「2023 NEW環境展、地球温暖化防止展」報告書

会員 柳沼 守好

(1) 概要

◆環境展 環境ビジネスの展開

◆地球温暖化防止展 CO₂削減と新エネビジネスの推進

視察日時 2023年5月25日(木)

場所 東京ビッグサイト

出展 585社(環境展—492社、地球温暖化防止展—93社)

(2) 展示会全体への感想等

初めて、NEW環境展、地球温暖化防止展を視察してまいりました。当たり前ですが、両展示会ともテーマの通り、ビジネスに重きが置かれた展示が多く、更に環境展においては廃棄物処理・再資源化・解体に関する企業の展示が大半を占め、現在の環境問題のほとんどが、廃棄物が原因で発生し、その対応に環境問題に関係する主要な人・金・物が注入されていることを強く感じました。

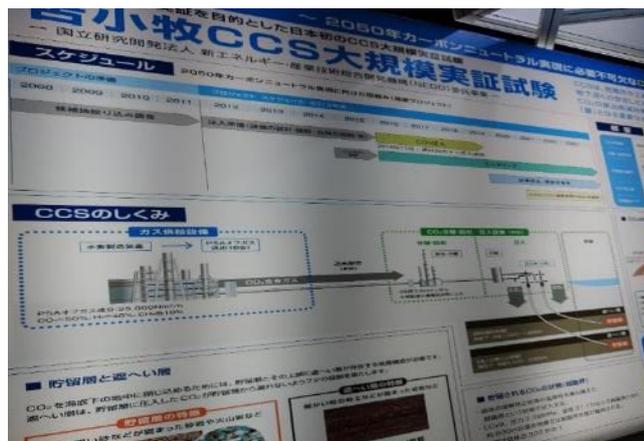
ただ、最大の環境問題への対応、解決方法はそもそも廃棄物(環境に悪い影響を与えるもの)を処理・再資源化・解体することではなく、それらを発生させないように活動することが環境問題に対して一番にしなければならないことだと改めて気づかされた。

又、地球温暖化防止展の方もCO₂削減と新エネビジネスの推進というテーマを掲げているが、ほとんどが省エネ・再エネや猛暑対策に関する展示が多く、従来型の問題解決型である手法のフォアキャストに終始していた。{地球温暖化防止・CO₂削減}というテーマ掲げるならば、将来の望ましい社会・環境像を見据えたバックキャスト的な考えに基づいた展示が環境展以上に、もっと有るべきだと感じた。



(3) 関心を持った展示—1, CCS (二酸化炭素回収・貯蓄) について

始まった当初から関心は有ったが、先日、福島県のカーボンニュートラルへの取り組みを聞いたばかりだったので、改めて展示を視察した。2019年に30万トンを入しモニタリングと設備の安全確保、機能改善等しながらCCSとCCU (二酸化炭素回収・有効利用) の連携運用の検討・準備段階だとのことだった。地球温暖化防止対策に大きな貢献をすることは理解できるが、大きなプロジェクトである為、私には理解できない部分 (ほとんど) やこのプロジェクトが今後、私達の活動にどんな影響を与えるのかは漠然としていまだに理解できないところである。地球温暖化防止に関して、今後も注目に値するに向けてプロジェクトなので自分もより勉強して理解を深め、環境カウンセラーになった暁にはこのようなプロジェクトに対しても見解を語れるようになりたいと思った。また、苫小牧での検証がある程度進み、次期のプロジェクト (主にCCSとCCU連携運用の具体化等) がどのような形で行われるのかにも大変興味がわいた。



(4) コケ栽培による温暖化防止について

自分が興味を持っている耕作放棄地問題についての対策方法の一つとして関心があった。この展示を企画していた、(株)モス山形様は屋上緑化の施工によって、省エネ効果・熱中症対策・工場立地法の緑化面積の確保を主に事業展開をしている会社であるが、私が興味を持ったのは耕作放棄地でのコケ栽培による、炭素クレジット化である。また、耕作放棄地でのコケ栽培は私の周囲はほとんどの土地が元水田の放棄地なのでそれらの土壌改良の必要性がどの程度あるのかを具体的に知りたいと思った。尚、コケ栽培は従来の米作中心の農業に比べて軽作業で済むことから高齢者でも従事することが出来、雇用促進にもつながると感じた。また、耕作放棄地等に係わると必ず農地法の問題が発生し、行政との交渉が必要になり、個人的に活動すると大変な労力を強いられるが、その点 (株)モス山形様も農業生産法人として活動している為、そうした行政との交渉ノウハウも持っていると思われるので、今後、そちらの話も詳しく聞きたい。この展示には結構多くの来場者が興味を持っていたようで混雑しており、ゆっくりと話を聞くこと出来なかった。今後、ネット等で調査して出来れば、コケ栽培の農地も見学したい。



以上

6. 入会に伴う自己紹介

会員 沼木 俊亮

会津若松市在住の沼木と申します。令和5年10月に本市で開催された第31回環境フェスタにおいてお声掛けいただくのをきっかけに入会しました。大学時代に福島大学共生システム理工学類において環境システムマネジメントを専攻し、後藤忍教授の研究室に所属していました。環境指標や環境メディア、環境計画などを学びながら、廃棄物の広域移動問題について研究していました。廃棄物の広域移動負荷を見える化するため、フードマイレージの概念から転換し廃棄物マイレージ（廃棄物量×移動距離）という指標を提案、商品のLCAを考慮した廃棄負荷を、消費者に購入時から考えてもらいたいという思いで進めていました。



それから東日本大震災の年に社会人となり、現在は消防本部に努めています。現在は仕事の傍ら防災士として地域活動も行っているところです。

地球規模での異常気象による洪水や林野火災などが激化し、人為的な影響による土砂災害も発生している昨今ですが、環境変化による影響が大規模な災害の発生や人命危険へと繋がる現状に危機感を覚えています。経験は浅いですがこれまでの経験や思いを微力ながら行動に繋げられなにかと思い、お声掛けをきっかけに入会しようと思い立ったところです。自然環境、エネルギー問題、廃棄物問題など幅広く関心を寄せています。

今年は福島市主催のエコ探検隊にサポーターとして参加する予定です。環境問題について小学生の子ども達の考えるきっかけになればと思っています。

私自身、環境団体に所属するのは初めてです。また学びながら「環境問題×防災」の観点を初心に今後皆さんと活動していけたらと思っています。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

7. 環境カウンセラー新人・よろしくお祈いします!

会 員 添 田 ゆ かり

このたび、環境カウンセラー（市民部門）として、協会に登録させていただきました。

私は廃棄物処理業に従事しながら、福島県地球温暖化防止推進員・環境教育インストラクター・地球温暖化防止コミュニケーターの認定を受け、自社リサイクル工場見学者・県内学校生徒・地域住民の皆様への環境講座や資源分別体験・SDGs イベントを行っております。

環境活動の中で、より環境について学びスキルアップをしたいと考え、環境カウンセラー審査合格するに至りました。

私が今後取り組みたいことの一つに「楽しい環境教育」があります。特に、保育所・小学校でのワークショップ・出前講座や環境イベントは積極的に進めたい意欲があります。

現状の環境を鑑みると、幼児期からの環境教育は大変重要であると考えており、持続可能な社会実現、次世代・全世界を視野に入れて行動できる人づくりは未来社会の担い手である子どもたちの育成につながることを期待しています。

各部門を得意とされる諸先輩方のご指導・アドバイスをいただきながら、福島県の環境カウンセラーとしてお役に立てるよう、精進してまいります。よろしくお祈いいたします。

～ 自分に何ができるかを考え、できることから少しずつ ～

